

三鷹市高齢者センターけやき苑認知症対応型通所介護
平成 29 年度上半期 運営推進会議

□ 日 時 平成 29 年 8 月 28 日 (月) 13 : 30 ~ 15 : 00

□ 場 所 けやき苑

□ 参加者 11 名

- ・利用者ご家族 4 名
- ・地域住民代表 (民生委員)
- ・知見を有する者 (小規模多機能型居宅介護 管理者)
- ・地域包括支援センター (大沢地域包括支援センター)
- ・けやき苑職員 4 名 (管理者、生活相談員 2 名、ソーシャルワーカー 1 名)

□ 議事内容

1) 主催者挨拶 (本会議の設置目的・趣旨説明)

2) 参加者自己紹介

3) 事業実績報告 別紙①

- ・上半期稼働率 (70 ~ 75%)、登録人数 (26 名)、平均年齢 (83 歳)、介護度や男女比など説明。

4) ヒヤリハット・事故報告 別紙②

(職員) 事故を予測しながらケアしている中で、利用者の予期せぬ行動で事故につながっている。

(委員) 徘徊の事故は同一人物ですか。

(職員) 別の方です。

(職員) ボールを蹴る事故 (蹴り返したボールが、他利用者の足元にぶつかった) については、ご本人の行動を抑えてしまうことにもなりかねないので、対応が難しいと感じている。

(委員) 未然 (ヒヤリハット) な段階で報告があげられていることは良いことだと思う。

(委員) 人員不足のなか、ご苦労されていると思うが、前年度からの職員数や体制の変化はどうか。

(所長) 大きな変化はないが、事故対策に関して現場レベルでの意識は強くなっていると感じている。

5) 登録移行について

(所長) なぜ、けやきの会が必要なのか。認知症対応型通所は数も少なく、認知症になっても一般型通所を利用している方が多い。また、今まで一般型通所を利用できていた方が、認知症対応型通所に利用を変更することに抵抗を感じる場合もある。これは利用者やご家族だけでなく、ケアマネージャーも認知症対応型通所をきちんと理解していない場合も多い。本日は認知症対応型通所とは何なのか、けやきの会の取り組みの報告を通して、地域の方にご理解いただければと思います。

(職員) 一般型の活動参加はできていても、空いた時間（移動場面や送迎バスを待つ間など）に不安感やソワソワ感と落ち着かない様子が強くなったり、職員が密に関わることで安心できるなど、個別対応の必要性が高い方を対象に、ご家族やケアマネージャーに相談のもと、登録移行をさせていただいている。

(職員) けやきの会は、専用の部屋を用意して、名札の色分け、座席札の設置など環境に配慮することで落ち着いて滞在することができ、顔馴染みの関係性を早く構築できると考えている。

(家族) けやきの会に参加するようになって、参加者が同じ顔触れで安心できている。しかし、家に帰ってきても、通所しているような様子や発言があり、家族としてはつらい時もある。

(家族) 今年4月頃に活動中に見学させてもらった。参加者が笑顔で楽しそうだった。自宅よりも良いのはないか。

(家族) 「認知症対応型通所介護」を希望して、けやきの会の通所を開始した。以前は一般型の通所施設だったが、専門性を重視して変更した。本人にとって、混乱する場面は少なくなっており、「行きたくない」との発言がなくなった。「けやきの会」をもっと知ってもらえるといいのではないか。

(委員) 「認知症対応型通所介護」という名前への抵抗感が強い。地域に「けやきの会」を伝えられればいいのではないか。

6) 利用者との交流（けやきの会活動に参加）

- ・ テーブルを囲んで、午前中に利用者が調理した水ようかん、お茶をいただく。
- ・ 和やかに交流しながら、各委員より利用者へ「調理は大変でしたか？」など直接問いかけている。利用者からも「美味しくできているといいですけど。」「お茶は足りていますか？」など、来客者を気遣う気持ちが伝わるお話が多く聞かれている。終始和やかな雰囲気だった。

7) 質疑応答、意見交換

(家族) 自宅にいる時よりも静かに参加していた。落ち着いて見えた。家とは違っていた。

(家族) 本人の様子を見ていると、楽しそうに参加していて良かった。家では会話も少なく、話し相手も私しかいない。週2回の通所でもこんなに発語が多くなるのは驚いた。近所の友人に誘われて、通所を初めて2ヶ月になるが、本人にとって居心地のいい場所だと思った。

(委員) 一般登録と認知症対応型登録の区別はどうしているのか？
登録変更はどのように行っているのか？

(職員) ルールとしての線引きはあるが（認知症の診断がある・認知に関わる薬が処方されている・医師の意見書にある認知症高齢者自立度など）、個々のケースで検討している。
あくまで必要とされるケアの内容であって、認知症の重症度による線引きではない。

(家族) 認知症状が悪化している。色々なことが分からなくなっている。水ようかんを食べる場面でも変化があった。食べさせてもらっていた。食事は自分でできるように、きっちりさせたい。通所することは嫌がっていない。自宅での介護がどこまでできるか不安だ。

(家族) 落ち着いて見えた。園芸が好きなので、自宅でできることをやらせてあげたいと思った。

(委員) ご家族とお話ができることが良かった。ご自宅での介護が大変な中、施設と一緒に生活を作っているが理解できた。本当に重要な事業と感じた。サービス提供者として、認知症対応型通所介護施設の数が少ないなか、もっと理解し、広めていかななくてはならない。

(職員) より良いサービスを提供すること。よりいい場所となるよう今後も努力します。

(委員) それぞれの専門家の交流会を毎月実施しているなかで、認知症対応型通所介護の意義をケアマネジャーの他、専門職に感じてもらえるよう伝えたい。



写真（運営推進会議の様子）



写真（利用者との交流）